



TITLE:

財政問題よりみた河上肇「貧乏物語」(河上 肇生誕100年記念号)

AUTHOR(S):

池上, 惇

---

CITATION:

池上, 惇. 財政問題よりみた河上肇「貧乏物語」(河上 肇生誕100年記念号). 経済論叢 1979, 124(5-6): 326-341

ISSUE DATE:

1979-11

URL:

<https://doi.org/10.14989/133794>

RIGHT:

# 經濟論叢

第124卷 第5・6号

河上 肇生誕100年記念号

---

福田徳三と河上 肇	杉 原 四 郎	1
初期河上における經濟政策論	大 野 英 二	21
河上 肇の「国家論」小考	住 谷 一 彦	50
漢詩人河上 肇の旧蔵書	一 海 知 義	65
河上 肇と「加算と減算」	高 寺 貞 男	87
『改版社会問題管見』序文	山 之 内 靖	99
財政問題よりみた河上 肇「貧乏物語」	池 上 惇	104
河上 肇における科学と宗教と哲学	古 田 光	120
<b>資 料</b>		
京都大学時代の河上 肇	細 川 元 雄	141

經 済 学 会 記 事

經濟論叢 第123卷・第124卷 総目録

---

昭和54年11・12月

京 都 大 學 經 濟 學 會

## 財政問題よりみた河上 肇「貧乏物語」

池 上 惇

### I はじめに——貧乏とのたたかい——

河上肇の「貧乏物語」は、彼の手になる数多くの著作のうちでも、とりわけ、特色のある作品として識者の注目をあつめてきた。それがとくに注目されてきたゆえんは、大別して二つあると考えられる。第一の特色は、この著作が、経済の繁栄の裏側に庶民の貧乏があることを鋭く指摘し、今日いう「貧困化」研究の基本的な視野を射程に収めており、それによって、貧困研究の手がかりを確立すると同時に、当時の日本社会をして貧困問題に注目せしめた、という事情である。大河内一男によれば「(河上)博士の言おうとしたのは、どんな国、どんな時代でも、経済が繁栄したり膨脹したりするような時代は、それを裏側からみると、必ず多数の国民は、物価騰貴や生活難になやんでいるし、一般的に言って、資本主義経済の発展は、庶民の『貧乏』の上に成り立っている、ということである。そこで博士は、『貧困』をなくすには、何はさておき、金持ちの『心掛け』を一変させ、かれらの贅沢をやめさせる外はない、と主張した。いまから考えると、至極単純な道義論のように思われるが、当時の日本人にとっては、まことに冷水一斗の効果があつたし、その点で『貧乏物語』は多数の読者を感激せしめたのだと思う。<sup>1)</sup>という指摘があり、これは的確な評価の一つであると思われる。勿論、当時の貧困化研究の水準からみて、「貧乏物語」における貧乏の実証は大半がイギリスの文献の検討におわり、日本資本主義の

1) 大河内一男「『貧乏物語』雑感」筑摩書房、河上肇著作集月報3、1964年8月、1ページ。また、大内兵衛は、1947年初刷の岩波文庫版「貧乏物語」の解題において、奢侈の廃止という河上の貧乏対策論をとりあげ、「河上博士は、このとき、なほ純然たるマルサス主義者に過ぎなかった」(同上、184ページ)と述べている。

発展と貧困化に及ぶ貧困化研究にはいまだ至っていないことは、当然の限界として考えるべき点であろう<sup>2)</sup>。

「貧乏物語」の第二の特色は、この著作が河上肇の思想発展史における位置づけにかかわるものであって、いわゆる「人道主義」「道義論」から、科学的経済研究への過渡期を形成しているところから生じる。そこでは、一方で、貧乏や、貧困化の諸原因に対する科学的認識の深化がみられ、現在の社会では、生産が有産富裕の人々のためにおこなわれ、国民全般のためには何ら、おこなわれておらないところに貧乏が生じる、という科学的な貧困認識がみられる。それと同時に、他方では、貧困の解決策として、金持ちがその奢侈をやめるよう勧告するかのごとき論旨が見出され、貧乏の道義主義的解決に重点がおかれるかにうかがわれ、大内兵衛によっては「マルサス主義」なる位置づけさえ、おこなわれてきた。後年、河上は、第二貧乏物語に筆をすすめ、自らの歩みを、1) 社会主義評論 (1905年、明治38年)、2) 貧乏物語 (1916年、大正5年)、3) 第二貧乏物語 (1929年、昭和4年)、の三段階に整理した。第一のものは、1905年の革命、第二のものは、1917年の革命という二つの革命の前夜に書かれているが、河上自身は、「これまで私が斯様な続物を書かうと思ひ立つたときには、さきも一言したように、いつでもそれ以前に戦争が爆発してゐた。そしてそれらの戦争“日露戦争および世界戦争”は、必ずや私の頭脳を刺激したのであら

2) このことは河上が日本の保健医療問題について早くから発言をおこない、日本の保健医療制度について具体的な提言をおこなってきた事実と矛盾するものではない。今井芳子によれば、河上の保健医療問題に対する発言は、明治39年ごろよりはじまり、労働保険、健康問題、診療料、都会の小児死亡、女子労働者、工場と結核患者、などを大正5年にかけてとりあげ、各紙誌で積極的な提言をおこなっている。イギリスの社会問題研究への関心は「貧乏物語」において、とくにつよくうかがわれるが、それは、今井の研究によれば、大正5年に公表された「小学児童食事公給問題」金井教授在職25年記念「最近社会政策」有斐閣、という論文に端的にあらわれている。今井はいう。「本論文が掲載された『最近社会政策』の刊行された当時(大5, 11)は、大阪朝日新聞紙上に連載中の『貧乏物語』が、大きな反響を呼び日本の経済学者の中でも第一級のジャーナリストとしての地位を河上が得た時期に相当する。欧州留学を終え帰国した河上は、京都帝国大学法科大学教授に任命され、まさしく油の乗り切った時期である。しかし、残念ながらその発言には、ブルジョア経済学者としての限界が少からず影をおとしている。とはいえ、たとえ意識していなかったとしても、河上が健康の維持と経済学の関連に言及していたことは銘記しておく必要がある。」今井芳子「経済学者からみた保健医療問題(下)——河上肇の場合——」医療経済研究会会報、No. 17, 1979, p. 37なお同論文(上)は、No. 15, 1979, に収められている。

うけれども、私自身は当時殆どそのことを意識してはゐなかつた。また、これまで私が斯様な続物を書かうと思ひ立つたときは、二度ながら不思議にも、革命“1905および1917年のロシア革命”の前夜に相当してゐたのだが、私はもちろん斯かる革命の勃発を少しも予期してはゐなかつた。だから私が結局において主張したものは、単なる個々人の道徳的の革命にすぎなかつた。」と述べ、社会主義評論の擲筆が、巢鴨の大日堂への入信をとまうと概括する一方、「貧乏物語」の結びを「ラスキン流の空想」と断じている<sup>3)</sup>。

だが、「社会主義評論」後の宗教への傾斜にもかかわらず、さらに「貧乏物語」にすすんだ河上は、貧乏研究から史的唯物論へ、社会革命の研究へと近付いていった。このことは、河上自身が、社会問題への関心として第二貧乏物語でつぎのように述べているところからも充分に知ることができる。

「社会問題は、私の教を受けた先生たちが『条約破棄の上奏』で世間の耳目をひいていた日露戦争の当時から、いま筆を執りつつある現在に至るまで、少くとも過去四分の一世紀にわたり、絶えず私の最大の関心事となし来つたものである。たとひ現在の私の立場は、世間の多くの人々から見て、如何に異端的に見えようとも、それは多年にわたる正直な思索の量的累積が齎らした質的変化の結果である。」<sup>4)</sup>

社会問題の研究にあたって、河上が、保健、医療といった人間そのものの健康に対していかに大きな関心を払ってきたかについては、今井芳子はその詳細な研究で論及しているとおりであるが<sup>5)</sup>、「貧乏物語」執筆当時の河上は、とくに、イギリスの食事公給条令に注目し、その効果を注意ぶかく見守っている。河上は、ここで、「貧乏とのたたかい」にあたっての財政問題の重要性に着目し、富者への重課と、児童、老人の健康のための財政確保の必要性を肯定的に展開してみせている。(後述)だが、イギリスにおいて展開されようとした多くの社会改良の施策は、河上の思想が、日本の現実——、とくに反民主主義的

3) 河上肇「第二貧乏物語」河上肇著作集、筑摩書房刊、第二巻、1964年、129—130ページ。

4) 同上、131ページ。

5) 今井芳子、前掲論文。

な天皇大権の存在する明治憲法下の日本の現実、日本の貧困に関心がむくにつれて、次第にその視野から遠去かり、貧困と財政の問題も同様の運命をたどることになる。当時の日本資本主義の実情からいえば、天皇制国家のもとで民主主義的権利は極端に制限され、イギリスの都市社会主義者たちが主張したような民主主義的財政政策を実行しうる条件は著しく乏しかった。日本では社会の多数者が民主主義的法律をつくり、反独占の性格をもつ課税や、国有化を通じて資本活動を規制しつつ労働者階級の統治能力が蓄積されてゆく、といった問題は1910年代にはおよそ、現実性を欠いていたろう。しかし、「貧乏物語」における河上は、イギリスに注目したこともあって「貧乏とのたたかい」を強調し、ロイド・ジョージを高く評価するなかで、否応なく、この問題にふれざるをえなかったし、財政問題の一定の展開や当時の法律の評価さえ試みた。この点こそ日本国憲法下の日本で「貧乏物語」をよむ者に、改めて、大きな共感を抱かせる一つの根拠となっているように思われる<sup>6)</sup>。

小論は、第二貧乏物語では後景に退いた『『貧乏物語』の財政問題』を再生し、これを道義主義の土台の上ではなく、科学的経済学の基礎上に位置づけられうるような萌芽が河上の思想発展のなかで、どのようにして形成されていたのかを問いかける一つの試論である。

河上は貧乏物語執筆後、大正7年の著書「社会問題管見」（弘文堂）では、「貧乏物語」の大半を収録しつつ、しかも冒頭には「マルクスの『資本論』なる論稿を登場せしめ、松方三郎によれば、大正8年当時の京大経済学部での河上の講義は『唯物史観』の説明よりはじめられたという<sup>7)</sup>。『貧乏物語』は

6) 「最期の『貧乏物語』では、博士は、国の繁栄と国民の『貧乏』との相反の関係を克明に追跡し、どうやったら『貧乏退治』ができるのかについて、こうも考え、あゝも考えた揚句、結局、いまの社会では生産が有産富裕な人間本位に行われ、貧乏人のための消費財が充分生産されなくなるので、みんなが生活難に喘いでいるのだから必要なことは、金持ちがその奢侈をやめることだと主張している。結論は単純だが、そこに至るまでの論理の筋道は読んでいてもおもしろいし、博士の苦しみぬいた思考の跡もよく判る……」大河内一男、前掲論文、2-3ページ、なお「貧乏物語」は、大正5年9月11日より、同年12月26日にわたり、断続して大阪朝日新聞に載せられ、大正6年2月に弘文堂より書物として刊行された。

7) 松方三郎「大正8・9年頃の河上先生」小林輝治ほか編「回想の河上肇」世界評論社、1948年、212-213ページ。

河上思想を社会問題を媒介としてマルクス主義にむかわしめた礎石とみてもよく、この点をふまえて、「貧乏物語」の財政学的検討をおこなうことも、貧困化と財政問題の研究にとって一定の意義を認めうるのみならず、河上に対する当時の多くの批判を彼が吸収し、巨大な思想家として登場しえた根拠の一つを解明するにも役立つであろう。

## II 「貧乏物語」における財政問題

「貧乏物語」における財政問題のとりあげ方は、河上肇の「貧乏」に対する理解と深くかかわっている。彼によれば、「……私の此物語に貧乏といふのは、身心の健全なる発達を維持するに必要な物資さへ得能はぬことなのだから、少くとも私の言ふ如き意味の貧乏なるものは、其觀念自身からして、必ず吾々の身心の健全なる発達を妨ぐべきものなので、其が利益となるべき筈は在り得ないのである。」<sup>8)</sup>したがって、この定義によるかぎり、貧乏とは、身心の健全な発達を維持するに必要な物資が経済的理由から保障されていない状態のことであり、人間の発達の可能性とそれを顕在化させる物質的条件、さらに、金銭的条件とのギャップの拡大のうちに彼は貧乏をみたのである。今日の貧困化論の到達した水準からみれば、人間の発達の可能性を資本主義のつくりだした機械や大工業の普及とどのようにかわらせるか、とか、人間の発達可能性をひきだすところの同じ機械が、資本主義的所有の下にある限りは、発達の障害をつくりだして、労働能力の貧弱化や、分業の細分化と結びつく、などの問題が当然に検討されねばならないであろう<sup>9)</sup>。もっとも、彼の著作はこれらの点にはふれていない。しかし、ともかくも、人間の発達可能性と、それに対する障害の拡大を貧乏ととらえたのは、河上の理論の基本的な特徴であった。彼は、こ

8) 河上肇「貧乏物語」、大内兵衛ほか監修「河上肇著作集」第二巻、筑摩書房、1964年、29ページ（以下「貧乏物語」はこの版による）。

9) 池上惇「現代資本主義財政論」有斐閣、1974年。終章「現代貧困論」を参照。現代における栄養など食生活にかかわる貧困分析については、長宏「現代の医療と福祉—食生活・住宅・医療費と生活費」ジュリスト、1974年10月臨時増刊号所収を参照。

の見地を具体化するために、標準的な労働に従事した人間が、人間として発達しうる物質的条件をまず、1日のカロリーに換算し、このカロリーをみたしうる金銭的な収入の有無をもって貧乏か否かを判定しようとする。したがって、貧乏人は、もし、食費以外の目的に収入を支出すれば、肉体の健康を犠牲にせざるをえない人々だということになる。彼はいう。

「言ふまでも無く、肉体の健康を維持する費用のみが吾々の生活に必要な費用の全部では無い。例へば衣服にしても、職業の種類によつては、単に寒暑を防ぎ健康に害なきだけのもので満足して居る訳には行かぬ。又子供が居れば学校にも出さなければならぬ。親の情として畜に子供の肉体を丈夫に育てるのみならず、其精神靈魂をも健全に育てる苦心をしなければならぬ。併し正に貧乏線上に在る人々は、凡て此の如き用途に充つべき余裕を有たぬ者であるから、縦ひ如何に有益又は必要なる事柄なりとも、若し肉体の健康維持といふ目的以外に何等かの支出をするならば、此等の人々は其れだけ肉体の健康を犠牲にしなければ為らぬのである。煙草を用ひ酒を飲みなどすれば無論のこと、新聞紙を購読しても、郵便一つ出しても、其度毎に肉体の健康を犠牲にしなければ為らぬのである。」<sup>10)</sup>

肉体の健康を土台として貧乏を定義した河上は、上の文章にみるかぎり、明確に精神生活を維持するサービスの購入が、肉体の健康を維持する物資の購入を制約し、人間の発達要求が高くなり、教育などに支出をふやせば、これがたちまち、肉体の健康の障害をつくりだすことを認めている。このことは逆にみれば、肉体の健康のみに腐心すれば、人なみの教育や文化、娯楽さええられないことを示唆し、貧乏は、その発現の形態として、精神生活と肉体の再生産のうち、いずれか一方をたてれば、他方が制約され、人間の発達が不調和とならざるをえないことを指摘しているとみることができよう。このような貧乏の理解は、人間の発達における障害としての貧乏が、人間の精神生活と肉体の再生産とのアンバランスとしてあらわれざるをえず、人間の発達に対する障害は、

10) 同上、13—14ページ。



かかる二律背反の形で表現されることを意味する。河上のこのような貧乏理解は、人間と経済の関係を科学的に把握しうる基礎として彼の思想形成に大きな役割を果たしただけでなく、現代における貧困化を考える上でも避けてとおることのできない重要な問題を提起したものであり<sup>11)</sup>、精神生活を維持するサービスの質や肉体の再生産を維持する商品の質を考慮に入れるならば<sup>12)</sup>、より全体的な貧困化の理解に接近しうる、すぐれた内容をもつものであった。これらは、河上が、人間の発達を、肉体、智能、靈魂の三側面からとらえつつ、肉体を基底において分析をすすめた結果であり、人間を精神と肉体の総合的な発展過程で把握しようと試みた、すぐれた視角が見事に反映している、というべきであろう<sup>13)</sup>。

このような考察の基礎の上にたって貧乏を文明の敵として把握した河上は、貧乏退治の戦争の重要性を説き、ロイド・ジョージらの業績を念頭におきつつ、貧乏との戦争の成果として、イギリスの食事公給条例、養老年金条例を高く評価しつつ紹介する。この二つの条例は、児童に対する栄養の確保と年金による生活安定をめざしたものであり、まさに財政措置をとまなう「戦争」であった。河上が詳細に紹介した条例内容のうち、財政とかかわる部分についてみると、1906年の食事公給条例の場合は、原則として児童の両親に必要な負担を求めるけれども、つぎのような場合、地方税よりの支出をみとめている。

「地方教育官庁にして、其管轄内に於ける小学校に通学しつつある児童の中、食物の不足の原因の為に、之に向って施されつつある教育の利益を十分に受けること能はざるものあるを認め、且公の財源以外の財源には、此条例に本く食事の給与に要する食物の費用を支弁するに用ふべきものなきか、又は其額不足

11) 例えば、森岡清美氏らのライフ・サイクルに関する研究はつぎのように述べている。「一人当り消費支出が大きく伸びている長子未就学から小学段階と中学から高校段階にかけてのこの二つの段階は、費用構成からみると雑費と被服費の増加がみられ、とくに中学から高校段階では雑費の増加が大きい。これに対して、この時期で大きく減少している費目として、食料費と住居費がある。……」岡田政子「家族周期と家計行動」森岡清美編「現代家族のライフサイクル」培風館、1977年、76ページ。

12) 池上、前掲論文参照。

することを確めた時は其旨を教育院（文部省）に通ずることを得る。而して教育院は地方教育官庁をして斯かる食物の給与の費用を支弁するに必要なだけの額をば、地方税の中より支出するの権限を有せしめ得る、但し地方教育官庁が一会計年度内に此目的の為に支出し得る総額は一ポンドにつき半ペニーの率を超えてはならぬ……。」<sup>14)</sup>

食事公給条例が主として地方自治体の財政にかかわったとすれば、養老年金条令は国家予算の大膨脹をもたらした。河上はいう。「……現に養老年金の一例に徴するも、1907年の実数に依れば、当時七十歳以上の老人は全国に於いて百二十五万四千人あり、仮に凡て是等の者に一週五志宛を支払ふとせんか、其経費の総額は一箇年実に壹億六千参百余万円の巨額に達するの計算であつた。是れ英国近時の財政が急に膨脹せざるを得ざるに至りし所以であつて、現に1908年度の予算編成に當つては、主として海軍拡張及び養老年金法実施の爲約壹億五千万円の歳入不足を見るに至つたものである。是に於いてか時の大蔵大臣ロイド・ジョージは己むを得ず一大増税計画を起し、土地増価税、所得税、自動車税、煙草税等の新設又は増徴を企てたものである。」<sup>15)</sup>

かかる増税の基本的方向は、河上の理解によれば貧乏との大戦争のための財源の確保であり、人間の発達を保障し、人間が人間らしく発達してゆけるための保障となるべきものであつた。例えば、食事公給条例の効果について、彼はいう。「今其成績は果して如何なりしやと云ふに、当時の記録によれば、此等の児童は食事の給与を受くるに及び、俄に其顔色が輝いて来て、其態度は快活になり、学業も之に応じて進歩を示したと云ふことである。」と。<sup>16)</sup>

それではかくも高い評価を与えられたこれら諸施策のための費用を誰に負担せしむべきかについて、河上はどのように考えていたのであろうか。先にあげられている税目のうち、土地増価税は、いわゆるキャピタル・ゲイン課税の一種であつて、富裕者の土地所有をもとに、地価の上昇にみあうキャピタル・ゲ

13) 河上肇、前出、9ページをみよ。

14) 同上、33ページ。

15) 同上、41—42ページ。

インに課税するものであるから、一種の不労所得への課税であり、金持ち階級への課税とみてさしつかえないであろう。また、当時の所得税は、今日ほどに低所得者を把握するに至っておらず、中、高額所得者を主たる対象とするものであったから、これも金持ち階級への負担増とうつつたにちがいない。自動車税も当時の普及状況からみて金持ち階級への課税とみなしてよかろう。煙草税はこれらとはちがって、大衆課税としての性格をもつことはいうまでもない。しかし、その大要において、ロイド・ジョージの増税案が、金持ち階級への負担増として評価されたのは当然の帰結であった。河上はつづける。

「只其課税自から富者に重かりしが故に、当時の予算案は議会の内外に於て騒然たる物論を惹起し、遂にはローズベリー卿をして、『宗教も、財産権も、又家族的生活も——万事が凡て終りである』と絶叫せしむるに至ったものである。」<sup>17)</sup>

富者、金持ち階級への課税、それによる福祉財源の確保というテーマは、まことに現代的なテーマであり、河上もまた、当時の状況下において、この命題を支持していたことは間違いない、と思われる。彼が、「貧乏物語」において高く評価するロイド・ジョージの演説を引いているのをみれば、彼の演説によって、間接に読者に訴えているのは、貧乏との戦争において金持ち階級の負担がふえて当然だとみていたことは自明のように思われる。ロイド・ジョージはいう。

「之は一の戦争予算である。貧乏と云ふものに対して評し置くべからざる戦を起すに必要な資金を調達せんが為の予算である」<sup>18)</sup>

福祉財源を富裕な階級の人々に負担せしめるという思想は、これをさらに徹底させてゆくと、富者への重税から、富者の財産、資産の国有化や公有化にいたる論議にみちをひらくものであって、当時のイギリスにおいても、ウェブ夫妻ら都市社会主義者は、産業の公有化などをはやくから主張している。河上が、

16) 同上、38ページ。

17) 同上、41-42ページ。

18) 同上、43ページ。

これらの動向、とくに産業国有化などについて関心を抱いており、社会主義論とのかかわりも意識していたことはまちがいないと思われるが、彼は、この点をさらに展開して、財政問題に深入りしようとはせず、むしろ貧困の解決を国家的な制度、財政による保障に重点をおくよりも、富裕者のモラル、奢侈の生活への自己抑制に重点をおいて結論を下してゆく。なぜ、頭をもたげた財政問題、とくに富者への課税による福祉財源確保の構想は「貧乏物語」のなかに定着しえなかったのか、つぎにこの点に立ち入らねばならない。

### III 国家の介入に対する河上肇の評価

貧乏との戦争のために富者に課税するという構想は、当時の状況にあっては、必ずしも純粹な形で、すなわち、貧乏との戦争という点にのみかかわってうたえられたものではない。20世紀のイギリス資本主義は、一方では社会政策費用の増加をまのあたりにしつつ、他方で、国防予算、とくに海軍の予算の膨脹にも直面していた。この関連でみると、社会政策支出は、戦費増大と抱きあわせの形で提案されているのであって、決して、貧乏とのたたかいのみの目的で、財政支出の必要性が訴えられているわけではない<sup>19)</sup>。それにもかかわらず、河上が、貧乏との戦争を一面的にとりだして強調したという事実は、彼が、個人主義の経済に対して国家主義の経済を対置したという事実と深くかかわっているように思われる。すなわち、彼は、貧乏のよってきたるゆえんを個人主義の経済の欠点から説き、この欠点を是正する方法の一つとして、国家主義の経済を対置し、国家主義の経済のなかに、生産事業の国有化、軍備、教育など、要するに、個人主義の経済への国家的介入を念頭においていたからである。

河上は、個人主義の経済の主唱者として、アダム・スミスをとりあげ、彼の主張の誤謬として二つの問題をあげる。第一は、「富の増加を計ることのみを

19) この点は河上の引用するロイド・ジョージの演説にも述べられているとおりであり、河上が、「貧乏物語」のなかで、社会主義よりむしろ国家主義という語を主として用いていることもあって、軍事と改良の抱合という当時の帝国主義政策に対してやや批判力の乏しい印象をあたえている。しかし、この点は、後述の対外進出と国内の失業との関連に彼の筆が及ぶとき、一定の解明が加えられることとなる。(後述)

以て即ち経済の使命なり」とした点であり、富は、「元来人生の目的——人が真の人となること——を達する為の一手段」であるにすぎず、富の生産のみにて分配が当をえなければ、社会的不平等が発生するという点、第二に、スミスは、「貨幣にて秤量したる富の価値をば、真に其の人生上の価値の標準とした」点であやまっており、かかる立場は、金持の奢侈という目的のための需要に依存した生産体制をつくりだし、真に社会公共の利益のための生産体制を生みだすものではない<sup>20)</sup>。以上の二つの理由から、個人主義経済を批判すれば、その処方箋はつぎの三つしかない。

「第一に、世の富者が若し自ら進んで一切の奢侈贅沢を廃止するに至るならば、貧乏存在の三条件の中その一を欠くに至るべきが故に、其は隨に貧乏退治の一策である。

第二に、何等かの方法を以て貧富の懸隔の甚しきを匡正し、社会一般人の所得をして著しき等差なからしむることを得るならば、これ亦貧乏存在の一条件を絶つ所以なるが故に、其も貧乏退治の一策と為し得る。

第三に、今日の如く各種の生産事業を私人の金儲け仕事に一任し置くことなく、例えば軍備又は教育の如く、国家自ら之を担当するに至るならば、現時の経済組織は之が為め著しく改造せらるる訳であるが、これも亦貧乏存在の一条件を無くする所以であって、貧乏退治の一策として自らの考へ到る所である。」<sup>21)</sup>

これら三つの対策のうち、河上は第三のものについて検討し、その必要性をみとめる。彼は、この限りでは、「経済上の国家主義」を支持する。しかし、いくらこの方策がよい手段であっても、それを実行するより人間がいなければ（彼のいう豪傑）駄目だ、という論をもちだして経済上の国家主義を第一位に推すことを断念し、金持に奢侈をやめるよう勧告するかにみえる方策を前面におし出す。この点はしばらく措いて、彼が支持する経済上の国家主義の内容を

20) 河上、前掲書、73—74ページ。

21) 同上、61—63ページ。なお、河上は、かかる結論のあとでスミス批判をおこなっているが、引用上の順序は逆になっているが、これは、彼が先に個人主義経済の批判をしてこれに対する対策を書き、その後スミスを総括的に論評しているためで、スミス批判の内容はこの引用の前すでに論じつくしてある。

きこう。

「現代経済組織の下に於いて個人主義の<sup>もたら</sup>齎せし最大弊害は、多数人の貧困である。而も今日の経済組織にして維持せらるる限り、而して社会には依然として貧富の懸隔を存し、富者は只その余裕あるに任せて種々の奢侈贅沢品を需要し行く限り、到底この社会より貧乏を根絶するの望なきが故に、遂に経済組織改造の論出づるに至る。詳しく曰へば貨物の生産をば私人の営利事業に一任し置くが如き今日の組織を変更し、重要な事業は大部分之を官業に移し、直接に国家の力を以て之を経営し行くこと、例へば今日の軍備の如く又教育の如き制度と為さんとするの主義即ち是れにして、余は先きの個人主義に対して、仮に之を経済上の国家主義と謂ふ。」<sup>22)</sup>

彼は経済上の国家主義をイギリスのみならず、「開戦以来」のドイツについても指摘しており、パンおよびパン用穀物の配給制に説き及び、「上は皇室及び皇族家を始め下は庶民に至るまで」すべて家族数に応じてパン切符の配布を受けるので、識者はこれを社会主義といっているが、「社会主義の語が避けたければ、之を国家主義の実行と言っても可いのである。」<sup>23)</sup>と述べている。かかる国家主義の理解にあっては、今は、多くの経済学の文献に登場してくるような産業の「官有化」と「民主的国有化」の区別、つまり、国家の経済への介入といっても、それが、巨大独占などに高利潤を保障し、国家めあての生産によって軍需品などを政府にうり込み、国庫に寄生して巨利を得るような制度と結びついたものかそれとも、国会、国有産業の労働組合、消費者団体などの民主主義的統制下に産業をおき国民経済に計画化を導入する手がかりを拡大しようとするような性格のものか、という区別<sup>24)</sup>は全くおこないえない。それ故に貧乏との戦争のために国家が経済に介入するにしても、それが富裕者に重税を課して福祉財源とするといったような財政、経済の民主主義化に資するものか、

22) 同上、74—75ページ。

23) 同上、77ページ。

24) 池上淳「レーニンの『経済の改造』論と経済的民主主義」岩尾裕純編「大企業の営業秘密」新日本出版社、1978年、参照。

それとも、大衆課税によって兵器、造船業などに巨利を保障する官僚主義的な海軍予算の膨脹なのか、といった区分はでてくるはずがないのである。したがって、経済上の国家主義という未分化な概念で、経済統制など、国家の経済への介入を論じたことによって、河上は、財政問題を通じてたどりついた一つの結論、富者への重税によって福祉財源を拡充してゆく、あるいは、産業の国有化によって営利主義を規制し、かかる産業の収益をもって福祉財源にあてうるような一つの構想を貧乏退治の手段としてさらにくわしく追求する、という途をとってしまった。営利主義や一部の人々の奢侈を社会的に規制する制度の考察を欠くばあい、経済の国家主義をになう人間の質に対して彼が関心を払ったのはある意味で当然であった。もし、かかる人間が、金持ちのいいなりになれば、一体何のために産業などの国有化をしたのか、まったくわからなくなってしまうからである。

#### IV 経済組織の改造と個人の精神の改造

経済組織の改造と、個人の精神の改造の相互関係を改めて問ひ、経済組織をかえるには、個人の精神の改造が必要であり、個人の精神を改造しようと思えば、経済組織を改造してその実績を示しつつ、個人の精神的改造の条件をつくりあげなければならない。いわば、この両者は相互に他を前提しあうという関係にあるのであって、どちらが重要かを一概にいうことはむずかしい。もし、人が河上肇は個人の精神の改造にのみ重きをおくモラリストなのだと言主張するとすれば、彼は、物事の二面性、相互前提性をみることのできなかった人物であり、当時の思想研究、経済学研究の制約の下でもなお考慮すべき点を逸したということになるであろう。だが、金持によびかけて奢侈を止めるよう勧告する河上肇像の存在にもかかわらず、彼の論旨には、経済組織の改造と個人の精神の改造の相互関係を述べ、明瞭に両者の関連について概括しているところがあり、この点をふまえた上で、「金持への勧告」がより根本的な問題としてうちだされている、という事実には注目しておく必要があろう。彼はいう。

「私は先きに、利己主義（個人主義）者を組織するに利他主義（国家主義）の社会組織を以てするは、石を包むに薄帛<sup>うすぎぬ</sup>を以てするが如きものと言った。併し其れならば、個人の改良を待って然る後社会組織の改造を行ふべきであるかと云ふに、以上述べ来りし如く、個人の改造そのものが又社会組織の改良に竣つ所があるのだから、議論をさう進めて来ると、譬へば鶯が空を舞ふやうに、問題は何時までも循環して果てしなきこととなる。為併し此の因果の相互的關係の循環限りなきが如き所に、複雑を極むる世態人情の真相が在る。それ故私は、社会問題を解決するが為には、社会組織の改造に着眼すると同時に、又社会を組織すべき個人の精神の改造に重きを置き、両端を攻めて理想郷に入らんとする者である。」<sup>25)</sup>

この場合、個人の精神の改造の方は、金持に奢侈をやめるよう勧告する、という主張がつよくあらわれているが、反面、社会組織の改良の方向は、どこに見出されているのか？ 貧乏物語の結論に近附くにつれて、この問題はときどきに姿を水面にあらわす。そして、社会組織改良の方向は、ここでは、軍備拡張などと、同一の次元で論じられることなく、金持の奢侈をいましめ、営利活動本位にむけられていた資本を、社会にとって有益な仕事をおこし、これを発展せしめるために使用すべきである、という明瞭な主張となってあらわれる。いわく、

「今英国人にとっては縁もなき異国人たる私が、改めて彼等の為に説くまでもなく、例へば『エコノミスト』主筆ウィザース氏が其近業『貧乏と無駄』の中に評論せるが如く、今日英国の本土内に於いても起すべき仕事が猶ほ沢山にあるのである。私は此物語の上篇に於いて、如何に英国民の大多数が貧乏線以下に沈落して衣食尚ほ給せざるの惨状に在るかを述べたが、此等人々の生活必要品を供給するだけでも己に相当な仕事が残って居ると言はなければならぬ。然るにも拘らず、最も資本に豊富な世界一の富国たる英国に於いて、其等の仕事が皆放棄されたままに為って居るのは、其等貧乏人の要求に應ずべき事業に

25) 河上、前掲書、89—90ページ。



放資するよりも、海外未開地の新事業に放資する方が儲が多いからである。かくて世界一の富国たる英国は同時に世界への貧乏人国として残りつつ、而も資本の輸出の競争の為に国運を賭してまで戦争しなければならなく為ったのである。」<sup>26)</sup>

社会に必要な仕事をおこして戦争の原因をとりのぞくというこの発想は、すくなくとも、貧乏退治の戦争と資本輸出のための戦争との区別にたちつつ、貧乏退治の方途を検討する手がかりをあたえている。「貧乏物語」の結論がこのような形で概括されているとするならば、河上肇のいう貧乏との大戦争が、金持への課税によって仕事をおこすための財源とし、それによって対外的な資本輸出のための戦争の原因をとりのぞきつつ、営利活動を規制し産業の国有化をすすめる、それらによって、個人の精神の改造、とくに、金もうけや奢侈から、人間そのものの発達を目的とする人間への改造を促進するものとなりうるであろう。モラリズムの背後にかくされているこのような展望は、独占段階における資本主義財政の特徴と方向を、当時の文献としてはきわめて先駆的に把握したものであり、このような視点からの財政と貧乏とのかわりに関する研究の必要性を示唆するものである<sup>27)</sup>。この点からみて「貧乏物語」を豊富のなかの貧困という問題の解明という点でのみ評価し、残余はモラリズムの狭い視野にとらわれていると評価することは、やや不十分さを免れないであろう。財政問題からみた「貧乏物語」は、実は、貴重な、現代的課題につながる側面をも不十分ながら、もちあわせていたというべきであろう。そして、河上をして、か

26) 同上、110ページ。

27) もちろん、このような河上の展開を、ホブソン流の帝国主義論として批判することは充分に可能であろう。しかし、ホブソン流の帝国主義批判にせよ、モラリズムとしての枠組みをすでに越えていることは事実であって、貧困認識がさらに科学的な内容へと発展してゆくならば、科学的な帝国主義批判に接近することも可能である。前掲の今井論文によれば、河上は、大正6年、弘文堂から、米国健康増進協会衛生顧問部監修、アイ・フィッシャー、エー・エル・ノイス共著「如何に生活すべき乎—最近科学を基礎としたる健康的生活法の諸規則」を翻訳、公刊している。この書物は、肉体、精神、霊魂にわたって、健康の総合的性格を論述しており、河上の健康に関する科学研究は一層の進展をみせていることがうかがわれる。これらが、大正8年以降の「社会問題研究」にひきつがれ産業合理化問題などの理解と結びつくとき、彼の貧乏認識が、さらに深化したであろうことは充分に推察しうるところであろう。

かる方向へ眼をむけさせた原動力が、人間の保健、医療、健康とかかわらせて経済を洞察し、人間をたえず、精神と肉体の統一物とみてやまなかった彼のひたむきな情熱であったこともまた、いうまでもない。榎田民藏をはじめ、河上に対する多くの批判は、彼の理論の空想性、小ブルジョア性をしばしば痛烈に批判し、河上も多くの場合、その批判をうけいれてきた。だが、批判をうけいれつつ河上の思想が成長してくる過程では、批判をうけ入れる容器そのものが大きくなければならない。河上は財政問題に対する彼の関心をみてもわかるように、人間を生命体として、全面的につかみ、その調和のとれた発達にこそもっともつよい関心をもっていた。この点こそ、すべての批判を科学にまで高めてゆく強紐な力の源泉であったのではなかろうか？　ここに、批判の正当性にもかかわらず、河上が、批判者をのりこえて、成長しえた根拠があるようにも思われるのである。